第15回みんゆう新聞感想文コンクール作品紹介

読んで考え 豊かな心育む

第15回みんゆう新聞感想文コンクールは、小学3年生から高校生まで県内57校・873点の作品が寄せられ、審査の結果、小学3・4年生の部、小学5・6年生の部、中学生の部、高校生の部の各部門で最優秀賞、優秀賞、入選及び学校賞が決まった。このうち、最優秀賞、優秀賞、入選及び学校賞に輝いた16作品を紹介する。【敬称略】

コンクールは新聞を活用した教育事業・NIEの一環として行われた。新聞を読み解く「読む力」、情報を論理的に思考する「考える力」により、広い視野と豊かな心を育んでもらうことが目的。

新聞のニュース記事をはじめ、特集記事や社説、コラム、投稿など様々な紙面を読み、感想や意見、提案などが自分の言葉で書かれた多くの作品が寄せられた。福島地区中学校教育研究会国語部長の吉川信夫福島市立清水中校長を審査長とし、厳正な審査を行い各賞を選んだ。

▽審査長＝吉川信夫（清水中校長）▽副審査長＝佐藤和彦（薬東小校長）▽審査員＝関沢唯（大森小）千葉光江（小国小）佐久間美樹（東和小）佐藤尚美（松陵中）斎藤詠美（川俣中）斎藤美佳（梁川中）皆川三穂子（醸芳中）斎藤瞳（大玉中）伊藤栞（本宮一中）梶川光生（県教育庁高校教育課指導主事）丹野孝典（福島民友新聞社編集局長）中田和宏（福島民友新聞社編集局次長）

各部門の入賞者

◇小学3・4年生の部

◆最優秀賞
鈴木理功（緑ケ丘一小4年）
◆優秀賞
結城永和子（郡山ザベリオ小3年）
渡辺陽菜（城北小3年）
久能和佳（福島大付小4年）
◆入選
佐藤鈴音（桜の聖母小3年）
伊東夢結里（鎌田小4年）
鈴木崇人（緑ケ丘一小4年）
根本ひより（鎌田小4年）
菅井快彦（福島大付小4年）

◇小学5・6年生の部

◆最優秀賞
村上遼太朗（杉妻小5年）
◆優秀賞
結城希和子（郡山ザベリオ小5年）
宗形碧（緑ケ丘一小5年）
久保木琴子（福島大付小5年）
◆入選
大島伊織（日新小5年）
遠藤幸奈（桜の聖母小5年）
斎藤柚羽（杉妻小5年）
渡辺結菜（城北小6年）
半谷顕（福島大付小6年）

◇中学生の部

◆最優秀賞
大内茶美（桜の聖母中2年）
◆優秀賞
坂本修吾（若松三中1年）
北野夏帆（石川義塾中1年）
長谷川慶佑（福島大付中2年）
◆入選
志賀彩花（平三中2年）
板倉圭佑（平三中2年）
八巻美海（北信中3年）
池田すみれ（北信中3年）
樽井惇（蓬莱中3年）

◇高校生の部

◆最優秀賞
角田絆（学法石川高1年）
◆優秀賞
大沼浬乃（尚志高2年）
加藤あすか（尚志高2年）
出川綾乃（学法石川高2年）
◆入選
南部晄志（尚志高2年）
橋本若奈（尚志高2年）
森川若葉（尚志高2年）
湯田和未（学法石川高2年）
鈴木みみ（学法石川高2年）

◇学校賞

福島大付小、郡山五中、学法石川高

4部門の最優秀賞

小学3・4年生の部

ぼくのおじいちゃん

緑ケ丘一小4年　鈴木（すずき）　理功（りく）

「いっしょに散歩行こう。」お母さんは、家族に毎日言っています。ぼくはサッカーが大好きなので、ボールを持って走って公園へ行きます。でも、おじいちゃんと歩く時は、ゆっくりです。おじいちゃんは、病気で体の右側が不自由になってしまったので、つえをついています。だから、散歩に行く時は、階段で転ばないように、お母さんが、体をささえたりしています。外は暑いし、体が不自由なのに、どうして散歩に行くのかなと思って聞いてみました。

「体のリハビリと、認知しょうにならないようにするためだよ。」

体が思うように動かせなくても努力して、散歩に行くおじいちゃんはすごいと思います。

認知しょうという言葉を知ったのは、高れい者と認知しょうのことが書いてある新聞記事を読んだのがきっかけです。その記事には、認知しょうは、ものを覚えたり、判断したりする力に問題があることと書いてありました。認知しょうになる可能性を減らすためには、バランスのいい食事、太りすぎない、運動すること、熱心に勉強すること、健康的な生活と予防することが大切と書いてありました。これは、「ぼくたち子どもでもできることかもしれない。」健康でいるためには高れい者も子どもも同じなのかなと思いました。

今は認知しょうより、認知しょうになる手前の高れい者の数が多いけれど、35年後には認知しょうの人の数が最も多くなる予測もっていました。35年後なんて想ぞうつかないけれど、僕は45歳、弟は42歳、両親は高れい者になっています。おじいちゃん、おばあちゃん、両親、家族みんなで、認知しょうにならないで、健康そして元気でいられたら一番いいなと思っています。

小学5・6年生の部

故郷（ふるさと）が抱えるごみ問題

杉妻小5年　村上（むらかみ）　遼太朗（りょうたろう）

ぼくの夢は、地球温暖化を食い止め、自然の豊かさと生き物の命を守る学者になること。そのため、環境問題に関する記事に特に関心があります。

その中で、「福島市ごみ排出量全国ワースト13位」という記事を読み、ぼくの住む福島市が多くのごみに悩まされていることを知りました。さらに、福島県全体としては全国ワーストであることに、とても驚きました。

課題は、可燃ごみの4割を占める生ごみの減量。市の取り組みとして、微生物の力で生ごみを分解する処理容器「キエーロ」の普及活動が紹介されていました。使い方や生ごみの現状を学ぶため「キエーロ講習会」にも参加。早速購入し、試し始めたところです。

でも、問題は家庭ごみだけではありません。道路や川への大量のポイ捨てごみ。その多くを占めるプラごみは、生ごみと違い微生物によって分解されないので、風化まで何十年もかかるそうです。誰も拾わなければ、アルミ缶は200年、ペットボトルは400年以上も環境破壊を続けることになってしまいます。

「ポイ捨てはダメ」と、大人が作ったルールなのに、大人が捨てたごみばかりなのは悲しいです。リサイクル率を上げて、生ごみを減らし、ポイ捨てごみも減らさなければ、本当の問題解決にはならないと思いました。

ぼくは、自然と生き物を守るために、4年前から道路や川のごみ拾いを続けています。頑張ってきれいにしても、わずかな期間で元に戻ってしまう場所もありますが、ぼくは決してあきらめたくはありません。

「きれいな県といえば福島県」そう思ってもらえるように、他人事ではなく協力し合えるように、この活動が多くの人につながることを、ぼくは強く願っています。

中学生の部

書店の灯火を守るために

桜の聖母中2年　大内（おおうち）　茶美（ちゃみ）

皆さんには行きつけの本屋はあるだろうか。私はこの記事で全国的に書店が減少していることに強い衝撃を受けた。書店ゼロの自治体もあり、私が住む福島県では50パーセント以下の自治体で書店が閉店していることを知った。考えてみると、私の家の近くでもここ何年かで3つの書店が閉店していった。この3か所は私が小さい時から通っている行きつけの店でとてもショックだった。そこで私は、どうしてこれほど街の本屋がなくなっていくのか不思議に思い、私なりに考えた。この記事には、書店減少の原因は進む過疎化とネット販売の増加と書かれていたが、私は自分の経験を元に他の観点からも考えてみた。

前に読んだネット記事では、コンビニや古本屋が増えたことで書店の新書が売れなくなったと書かれていた。雑誌がコンビニで販売されるようになり書店で買う人が減った。また、古本屋では新書よりも安価で買うことができるのも原因だそうだ。

皆さんはこのような経験をしたことはないだろうか。例えば、参考書だけ欲しかったのに他の本までつい買ってしまうこと、行った書店に欲しかった本の在庫がなく、遠くまで何軒もはしごしたことなど。私は書店に入った途端、真っ先に目に入るところにおもしろそうな本があると、目移りして買うつもりがなくても買ってしまうことがよくある。これらの現象は実店舗ならではのものだろう。ネット通販ではこれは起こりづらくアマゾンなら送料無料で家に届くので交通費や時間を使う必要もない。しかし、実店舗に行くメリットもある。書店に入るとまず、キラキラとしたポップがつけられたその店おすすめの本が目に飛びこんでくる。自分の好みのジャンルでなくてもポップに興味をひかれ手にとってしまう。ネット通販では、自分の欲しい本を見つけて買うのは簡単でも、新しいジャンルの本に出会うのはなかなか難しいだろう。だが、書店では自分の興味がなかったジャンルの本も自然と目に入り、視野や知識を広めることができる。

海外では書店の売り上げを守るためにネット通販の送料無料を禁止している国もある。さらに公共の図書館などが本を買う時、地域の書店を優先する取り組みも行われているそうだ。日本でもぜひ取り入れてほしいと願う。そして、書店減少には本離れや人口減少など多くの原因があり、出版業界の構造にも問題があると調べていて分かった。しかし私は実際に書店で本を手に取って選ぶ時間が好きだ。

今後、必要に応じて電子書籍やネット通販から購入することもあるとは思うが、私は街の本屋を守るために通い続けたい。そして、これからも本屋のある街に住みたい。

高校生の部

ここから

学法石川高1年　角田（つのだ）　絆（きずな）

私は7月18日にあった福島民友新聞であげられた原町一中のジャージが紺色に統一されたことについて取り上げる。このことについて記事で堀内浩明教頭は『子どもたちの意見を尊重し、（色が異なることにより）嫌な思いをする生徒を減らすことにつながればと思う』」と話している。

このことによって、ジェンダー平等が進むとともに、子どもたちの間でも一体感が強まっていくと考える。運動着の色が統一された理由は、性同一性障害などに対する配慮や、生徒からの意見を踏まえての判断だ。生徒からは「『ジェンダー平等が服から表せており、とてもいい試みだと思う』」や「『同じ色なので平等。男女仲良く親近感が生まれたかも』」という意見が出ている。男女を区別する事は場合によっては必要であるが、色で分ける必要はないと思う。青は男性、赤は女性などの固定概念が差別を生む原因になったり、女の子なんだから、男の子なんだからという性別にとらわれた考え方を作り出してしまうのだろう。運動着の色を統一するだけでも、性別の特定が以前よりも難しくなり、犯罪に巻き込まれるリスクが下がるなどの効果を期待できるという。一方で、統合が視野に入る小規模校では運動着の変更が、家庭の負担増加につながる可能性もある。良い面もあるが、家庭の事情により運動着を変えられないこともあるため、一概に統一すべきだと言えないのが現状だ。

この記事を読んで、私の地域の学校には男女で異なる色の運動着を着用している学校がなかったので驚いた。もし私の学校の運動着の色が男女で異なったら、今より男女の壁はあったと思う。運動着の色は統一されてきているので、制服の自由選択も進めた方がいいと思う。女子のスラックス導入は進んでいるが、男子の制服は一通りしかないので選択肢を増やすべきだろう。男女平等に意思決定の機会を与えてあげないといけないと思う。

今後、運動着の統一が進んでいくと思うが、統一するだけではなく、選択できるようにするべきだと考える。ジェンダー平等を服から表すこの取り組みは全国に広まるだろう。まずは目に見える所からジェンダー平等を目指しているという点で効果的な試みだと思う。これをきっかけに、見た目だけではなく考え方の男女平等も広まっていけばいいと思う。

審査長講評

福島地区中学校教育研究会国語部長
吉川　信夫
（清水中校長）

本コンクールは、新聞記事の感想文を書くことで広い視野と豊かな心を養う目的で開催されています。本年度は、小・中・高合わせて57校、873点の作品が寄せられました。多くの皆さんが参加してくれたことを大変うれしく思っております。全体的に見ますと、新聞記事から触発され自分で調べながら思考を深めていったり、授業や旅行で体験したことと新聞記事を関連付けて自分の意見を述べたりなど、それぞれの学年にふさわしい中身の濃い作品が多かったように思います。

小学3・4年生の部では、自分の生活に密着した新聞記事を取り上げている作品が目立ちました。地域の行事、食料自給率、ごみの減量化、地球温暖化などの問題を取り上げ、その解決を図る一員になろうという意欲的な内容が多く見られました。

小学5・6年生の部になると、広く社会に目を向けた作品が多く見られました。特に授業と関連性の高い記事を見つけ、様々な資料をもとに自分の考えを深める作品が多かったのには目を見張りました。また、しっかりとした意見をもつレベルの高い作品も見られました。

多くの気づき 将来に生かす

中学生の部では、さらに視野が広がります。歴史、人権、災害など、これから私たちが解決しなくてはならない問題を様々な観点から解決を図っていこうとする若者らしい素直な作品が多く見られました。私たち大人もハッとする作品もありました。

高校生の部になると、大人の視点から記事を見つめ、課題を自分事として捉えている作品が多くなりました。男女平等、交通格差、平和、AIなど、現代社会が抱える問題に鋭くメスを入れた質の高い作品が揃いました。

新聞には実に多くの記事が載っています。そこから多くの気づきを得て、考えを深めることはきっと将来に生かせるはずです。皆さんには、これからの社会を明るく照らす心豊かな大人になってほしいと思います。